

甲南中学・高校
図書館
図書委員会
芦屋市山手町
31番3号

読書三昧

第82号
平成21年2月24日
高三 中山 裕介
高二 木下 昌彦

灘甲戦の報告

「灘甲戦交流会を振り返って」
中学三年 碓 一稀

六月三日、僕は初めて灘との読書交流会に参加しました。初めて参加したので少し緊張しましたが名だの人達が気さくな人達だったので、そこまで気負いせずに交流会を進めることができました。さて、ここからは交流会の内容について振り返って見たいと思います。

この交流会で取り上げた本は重松清の「きみのもとたち」という本で、この本は一番最初の話に出てくる女の子、恵美に關係する人達の友達を題材とする短編集です。この本についての議論の中で最も重要となったのは、本当の友達とは何か、友達のある方は何かという点でした。例えば、ねじれの位置というお話の話は恵美の弟、フンとその友達モトが友達になる前、フンが転校生だったモトに反発していた時

の話です。この話で注目すべき点は、この話の名前にもなっている「ねじれの位置」という言葉です。ねじれの位置とは絶対に交わることのない位置、そこから考えられる話の最後で友達になった二人がジャングルジムにそれぞれねじれの位置で座っていることから、友達とは交わらないほど長く友達でいられる、交わりとお互い主観的に見てもしまつとも解釈できます。討論ではこのようにこの話はある意味でこめられているという意見を交換し



合いました。

主な内容は友達についてだったのですが、他にも恵美やその友達の由香が話しの途中で時々言っていた「もこもこ雲」の意味について、またこの本に登場する「みんな」と「きみ」についての話も重要な議題でした。この本においての「みんな」というのは恵美も含めて恵美に関わった人達であって、重松清さんは短編集にすることをよって「みんな」を分けたと考えられます。なぜその

ようにしたか、それは「みんな」というのは個人の集まりであるということを表現したかったのだと思います。今回の交流会は全体的に積極的に討論しやすかったのですが、比較的に灘の方達の方がより多く意見を言っていました。来年の灘高戦は灘で行われるので交流会も灘で行なわれるという事になりま

研修会に行つて 中一 黒岩亮佑

たらしいなと思います。僕は十一月半ばに研修会に行きました。僕は研修会に行った人の中で一人だけ中学1年だったので、軽くびっくりしました。けれども、文化祭の祭りの古本市もしていたのでしていたので、そこまでヒックリしませんでした。2回目になって

も慣れていないのがダメだと思いました。場所は啓明中学校で行くのに1時間程度かかりました。最初に他の学校の図書館からの配り物ももらいました。啓明中の図書館は、

4	目次
3	1 灘甲戦を振り返って
2	2 3 国語科 塩見先生
1	「長谷川元湯と甲南高校」
1	委員長の一言
1	編集後記
1	本の紹介

て発表することになり
ました。僕らは5つのテ
マについてボスターを書
いて、まとめました。発
表する時は人数が少なかっ
たので発言する量が多く
なったので緊張しました。
この研修会に行った感

想は、ほとんどの人が、
利用しやすい図書館とい
う理想が多かったので、
僕は甲南の図書館を、利
用しやすく快適な図書
館に、する為に図書委員
の一員である僕も頑張っ
ていこうと思います。

私達は、今回は、国語科の塩見
先生に原稿を依頼しました。
塩見先生はの本を紹介してくださ
いました。本の詳細は、次に紹介し
ています。興味のあるものは、ぜひ
読んでください。

国語科 塩見 恵介先生
「長谷川元湯と甲南高校」

俳句と言えは、松尾芭
蕉 正岡子規 という名
前は有名です。もう少し
知っている人なら高浜虚
子という名前も知ってい
ると思います。さて、今
回 私がここで紹介した
い俳句作家は長谷川素
透という人です。みなさん
ご存じですか？若い頃に
はさよならと梅雨の軍窓
に指で書くなどとても口
マンチックな俳句を作っ
ている人です。本名は長

谷川直次郎。日本が中国
と戦争をしている頃、戦
地に砲兵として赴き、そ
のありさまを憂くする砲
車とともにわれこそ往け
わが馬をうつむと兵ら枯
野掘る胸射めかれし外套
の衣を剪りて脱がすなど
昭和十四年にして、いち
早く多くの俳句にものし
『砲車』という句集を発
表します。当時の俳句誌
などでこうした句は大い
に取り上げられ、それこ
そ一世を風靡したのでし

た。ところが、昭和二十
一年、四十歳の若さで肺
結核で亡くなり、師の高
浜虚子を大いに嘆かせた
のです。『砲車』があま
りにも有名で、その後の
彼の作品には昨今まであ
まり日の目があたわなかつ
たのですが、最近何人か
の人が彼の晩年（といつ
ても昭和十五年）二十一
年という短い期間ですが）
の作品に興味を持ってい
ます。例えば、『現代俳
句大辞典』三省堂（二〇
〇五年）には次のように
紹介されています。

素透といえは世はず
もって専ら『砲車』を語
るがそれは素透の本意で
はないだろう。素透最後
の『定本素透句集』（一
九四七年刊）からは『砲
車』の句がすべて外され
ている。もとより素透は
この世を静かにやかに眺
めて微笑みながら生きて
いった人である。そのよ
うな素透の本質は初期の
頃からはっきりとしてい
る。晩年の素透の句には
ようやく本来の素透らし
さが濃く見られるが既に
自らの命の行方を知った
ものの淋しさが沿っていた
。素透は戦争をうたっ
た人ではなく戦争の犠牲

になりました。
ところで、この人の晩
年の生活については『砲
車』を書いた頃ほど、詳
しいことが発表されてい
ません。実は、この人
その晩年こそを旧制甲南
高等学校の教授（国語科）
として生きた人なのです。
この時代のことについて
たとえば、兵庫ゆかりの
俳人たち（柿衛文庫編
一九九八年）には「陸
軍中尉という肩書きが生
徒監（注：現在の生徒指
導部長）の職務に就か
せるなどたいへんだった」
などと紹介されています。
本に書いてあることな
ので、何の疑いも感じな
かった私は、長谷川素透
という俳人は、いっぽう
でまた、軍人上がりの教
師らしい、大きな声で
堂々とはつらつとした、何
と格好いい先生だったの
だろう、と憧れました。
そこで、この人について
学園では資料が残ってい
ないか、数年前から少し
ずつではありますが、時
間の許す限り調べること
にしました。

長谷川素透に関する資
料は、甲南学園史資料室
に数多く残っていました。
たとえば次のようなもの
がありました。
就職時の自筆履歴書
（昭和十五年十月現在）
昭和十六年学園住所録
昭和十六年
十七年の俵給表
昭和十六年の辞令
昭和十六年、十七年の
授業担当芳名
使用教科書
昭和十七年雑誌「甲南」
寄稿文
昭和二十一年辞職願
残念ながら、当時は物
資不足のため卒業アルバ
ムは全体で作られていま
せん。そこで素透の写真
はまだ見つかっていませ
ん。
は現在確認されてい
る彼の履歴書としては、
もっとも新しい時代まで
書かれているもので貴重
なものだと思われま
す。
については、最近ま
で、甲南教授時代の彼の
住所や家の間取りなど詳
しいことは分かっていま
せんでしたが、その住ま
いはどうやら「甲南長屋
」とよばれた小さな職員住
宅だったようなのです。
慎重に生活が見えてき
ました。
は両年とも「百五十
円」と書かれています。
素透は几帳面な人で、前

述の履歴書の中に前任校
（中学教師時代）の俵給
を書いていきます。そこで
は「百円」でした。戦前
の甲南は専売科（中学）
の教師も大学教授レベル
の、破格の俵給です。
どうやら素透は初年
度専売科一年（二クラス
×四時間＝八時間）教え
ていたようです。ちなみ
に甲南は戦時中もA・B
組という呼び方でした。
当時素透が授業に使用
していた岩波書店の国語の
教科書が、小島孝氏（現・
神戸大学法学部名誉教授）
の寄贈が残っています。
素透は特に、昭和十七
年当時旧制高校三年の生
徒と親しかったらしく、
放課後に国語研究室（現・
国語準備室）で何人かの
生徒の俳句の添削をした
り、数名の先生と生徒で
句会をしたりしていたと
いうことですが、それを
忍ばせる資料です。寄稿
文は若き日の正岡子規に
ついて丁寧に書かれた研
究論文です。
昭和二十一年三月三
十一日付で、肺結核の診
断書とともにひっそりと
あります。
残念ながらこれらの資
料は、貴志康一や長谷川
三郎ほど丁寧には扱われ
てはいません。彼らが甲
南のOBであるのは異
なり、長谷川素透は教職
員として、しかも5年し
か務めていないのだから
仕方のないことではあり
ます。
そこで今、彼の教える
だった先輩方に、出来る
限り話をうかがっていま
す。もちろん皆さん、も
う八十歳くらいの方が
りです。そこで出てくる
話は、本で書かれてある
ことと全く違いました。
当時、怖い生徒監（現・
生徒指導部）の先生がい
て、みなさん真つ先にそ
の先生の名前をおつしや
るのですが、それは素透
ではありませんでした。
素透の印象を聞くと、「大
人しい印象で、授業は地
味。思い出はあまりない」
とか、「痔で悩んではずた」
とか、「大阪弁と違う」標
準語に近かった。小説で



『チャーちゃん』というのがでてきたときのその読み方が面白かったからあだ名はチャーちゃんやうた」とか。美談や武勇伝とはかけ離れた、なんとも言い難いエピソードが集められないのです。でも、それが人間だなあ、とも思うのです。素遊がますます好きになっていくのでした。

素遊だけではなく、戦中の甲南についても、この先輩方にかがった、愉快なエピソードはたくさんあります。たとえば、前述の小島孝氏はこんなふうに当時の甲南を方って下さいました。

当時は、2クラス、1クラス40人、男ばかり名簿の中に落第とあるのは落第生。尋常科（現・中学）にも落第があった。

授業は朝8時から、4時くらいまで、授業が終わると、すぐには帰れない。生徒はわつた後、グラウンドに集合して、学校の周りを2周して帰る。2ヶ月くらい。15分クラス単位で走る。担任の先生は隅で見ている。その当時は、先生を恨んだが、今になつたら、感謝して

いる。二号线には阪神国道の市電（チンチン電車）が走っていて、生徒は通学に利用していた。ただし暑りの現「甲南学園前」の停留所は使わせてもらえない。一つ隣の現「田中」で降りて来なさいというルールだった。遅刻しそうなになると、そんなこと言つてられないので、「甲南学園前」で降りて走つた。ばれてひどく叱られて、いる生徒もいたが、ただ、高等科になると、免許があれば自動車も運転してきても良かった時代があった。自動車が当時珍しいものだが、良家の子弟で持っているものもいた。

ただ、私が入学する前に、阪急電車の踏切で電車と衝突して生徒が亡くなったということがあったというのだ。ただし、その事故がきっかけで学園側が、阪急に申し入れをして、線路を高架にしてもらつたらしい。

ネイティブの英語の先生がおられた。口バート先生（昭和十四年着任、同二十年まで。）甲南は日本人の先生も日本が負けるから英語を勉強

強しておけ、と戦中と言つてた。制服は冬は紺のサージ。夏は白の麻。ゲートルをまくようになったのは太平洋戦争末期。近隣にある灘高校は戦前からゲートル。神戸一中は国防色の帽子を被つてた。教習研究室は教科ごと。職員室はなく、教科の研究室しかなかった。寒い日は、いろんな先生方がストーブのある部屋に集まっていた。

昼になると、全校生徒、教員が食堂（現8号館跡）に集まって、一斉に食事をした。これは平生先生の方針。平生先生が当時で五千円も大金を寄付して建てた。

戦中配給になつていたので、学校に家から米そのものを持っていく。それを食堂が朝の内に人数分焚いておいてくれる。昼に行くとき井が並んでいる。ただどんぶり飯一杯ぐらいは男に足りない。欠席者の分まで用意されているので、その井の上



に帽子をかぶせて、かくしておいて、仲間できつそり山分けして食べる。ばれたらおこられるが、それも、先生によつて、叱る先生、見て見ぬ振りをしてる先生、笑つてる先生、いろいろいた。もっと紹介したいところですが、紙面がつかまじた。素遊が甲南教授時代

私に、今まで編集を主にしてきたので感想文などを書いたことがありませんでした。しかし、今回が私の編集する最後の読書三昧だということで、いくつ文章を書くことにしました。まず、私がお勧めする本、そして、今まで活動した時の感想をまとめました。ぜひ、読んでください

て生きていた教師でした。私がお勧めする本は、『カラフル』です。この小説は、前世で大きなあやまちを働いて死んだ人の魂が生まれ変わるための修行をしていく様子を

に編んだ。ふるさと（昭和十八年）という句集から、次のように詠まれた甲南を紹介して筆を置きたいと思ひます。

委員長の一言
高校三年 中山 裕介

『生徒らと五月の朝の空開けて』昭和十六年、日本全体が戦争という闇へ突っ走つていた時、素遊は、「生徒らと」ともに窓をあけてください。

描いています。その修行とは、一定の期間、下界にいる誰かの体を借りて過ごすというもの。初めて見る家族、一見普通の平凡な家族だが、実際そこ

密や体を貸してくれていた人の正体などが、少しずつ見えてくる。そのたびに変化していく魂の思ひなどが様々に描かれています。そしてその修行の本当の意味とは一体何なのか。

私は高校一年の時に副委員長に、高校一年で委員長を経験しました。その間に様々な交流会をしました。交流会では多くの学校と関わりを持つことができてとてもいい経験になりました。また一冊の本や物事にみんなが考え意見を出し合うことの楽しさなども感じられました。今年の十一月には古本市を開催し多くの方々に来て頂きました。自分

描いています。その修行とは、一定の期間、下界にいる誰かの体を借りて過ごすというもの。初めて見る家族、一見普通の平凡な家族だが、実際そこ

書名	カラフル
著者名	森絵都
出版者	理論社
分類	Y もり



「編集後記」
今回の読書三昧はいいが、だつたでしようか、年度末ぎりぎりの発行でしたがなんとか発行できました。今までも多くの活動に参加して多くの方々を支えられてきたのだな、と感じます。今までありがとうございました。これからも図書委員をよろしくお願いします。（図書委員一同）

『ホームレス中学生』 中学二年 萩原 一貴

この作品は、麒麟の田村さんが貧乏な中学生生活をしていたときの話です。中学二年の一学期の終業式の後、家に帰ってきたら、家具に「差し押さえ」と書かれたテープがクロスに貼られていて、それにびっくりしていると、お父さんが戻ってきた。すると突然「解散!」と言い残しどこかへ行ってしまった。そして、いきなり変な人生をおくるといふストーリーです。

その後、変わった形をした遊具のある公園で何日も生活したり、マラソン大会で優勝すると直後に緑色の鼻水が出てしまい、みんなから引かれたり…。という様々な出来事がたくさんあります。

おもしろいストーリーなので、ぜひ読んでみてください。

著者名 田村裕
出版者 ワニブックス
分類 Y たむ



お知らせ

次回の読書三昧では、2009年に行つた古本市の様子をお知らせいたします。

コンダクター

高校三年 箱川 義樹

この本は「心靈探偵八雲」でお馴染みの神永学の最新作。そして、この作品は「心靈探偵八雲」のような『現実味を帯びていない現実のような物語』ではなく、『現実感溢れるサスペンスであり、どこか現実味に欠ける』とでもいいますか。とにかく、今までの作品とはまったく違った感覚が味わえます。

さて、タイトルにもなっている「コンダクター」。あまり聞きなれない単語のような気がします。コンダクターとは、俗に言う「指揮者」が主な意味で、これにはもうひとつの意味があります。

それは「案内人」という意味。この本で紡がれる物語は主に音大が舞台で、ある日、変死体がアパートで発見される。そこからすべてが始まっていく…。それとは別に展開されていく音大生の日常…。しかし、時を同じくして日常が歪み、捻じ曲がっていく…。

すべての始まりはある音大生の「夢」から始まります。それはただの夢のはずなのに、夢でない感覚、強く鮮明に覚えていて忘れられない、そういうった夢。たぶん皆さんにも一度くらいは経験があるのでは?、と話がそれましたね、失敬失敬。そして、そこから数々の登場人物が出てきます。警察や同級生やいると出てきます。この本だけで、多くの人間模様を見ることもできるでしょう。誰が殺し、誰がだまし、誰が欺き、何が真実で何が偽りなのか…。そして、それぞれが疑心暗鬼に陥っていく。果たして真実はいったい何でどこへ行くのか?そしてコンダクターは誰なのか?謎解きしながら読み進めていくとな面白さが増すと思います。最後まで読まないといけません。最後まで読みたくなる独特の面白さがあります。

また、普通、登場人物たちの視点に立ちながら読むのが読書の定石ですが、この本は登場人物たちの視点に立つては、『いけない』作品でした。物語が進むにつれ、それぞれの思惑や感情が交差していき、より深くへと誘われていくにもかかわらず、別のところでだんだんと現実を引き戻される感じがします。そういうった独特の感覚を一度でも味わつとより深みにはまっていきます。そこもまた面白ところですよ。



書名 コンダクター
著者名 神永 学
出版社 角川書店
分類 Y かみ 1